弁護士日記

スバルはどこに輝くか（完）

美和勇夫

スバルは、一つの星ではなく、一二〇個くらいがひとかたまりとなっている星の群団（星団）である。

凍てついて、さえわたった冬の星でも、スバルは雲の流れなどで良く見える夜とそうでない夜がある。

視力が一・二ぐらいある人は、四個～六個のホタルのようで小さくきれいな星が固まって見えるが、目のよくない人には、星団全体がボーッとにぶく光っているだけだ。

昔の日本人は、スバルの星が、集まってひとつになることを「統ばる」という「動詞」であらわした。

数個の小さく輝く星を「玉」として、糸で「統ばる」（つなぐ）玉飾りと見立てたのであろう。優雅なものだ。

○　○　○

清少納言が「枕草子」の中で「星は昴」と書いた、一二〇〇年も前の平安時代の冬の夜空は、漆黒の闇の中であった。ネオンも電燈も大気のよごれもなく、澄んでいて、（その頃は、目を酷使することはなかったから皆視力も良く）、六個ぐらいの星が「小さなホタルの群れ」のように、固まって美しく輝いていたに違いない。

スバルを「六連星」という呼び名も残っているくらいである。

○　○　○

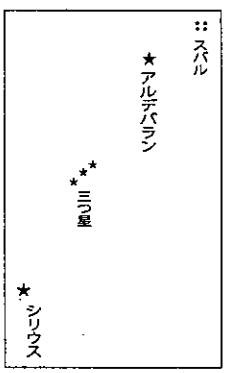
スバルをはじめとする「冬の星座」は、空が暗くなりはじめる六時頃に、南東の低いところにあらわれ、七時、八時と時間のたつにつれ、「星座全体」がしだいに、天空高く昇る。

〝オリオン舞い立ち、スバルはさざめく〟

「冬の星座」で歌われるごとく、三つ星のオリオン座をはじめとする星々は南の空（天空劇場スクリーン）に舞い上がってくるのである。

やがて星達は西南へ刻々移動し、午前二時頃には、（太陽が沈むように）西へ沈んで姿を消す。

（図は、夜七時半頃のものであるが、三つ星の先にアルデバランがあり、これをスバルとまちがえやすい。これらの星は、縦に近い角度のならびから、九時、十時…としだいに横ならびに近いものになってくる。まもなく、満月で、月の光がスバルを見るにはじゃまではある。）



○　○　○

「さらば昴よ！」

とひとくちには言うが、スバルは四一〇光年のかなたにある。

一光年は、光が一年間かかって進む距離であり「ケタ数」が多くて、電卓では数字が出て来ない。光が四一〇年もかかって、地球に到達する立体空間なんて人類の頭脳ではとうてい理解できない。

（遠くにあると思われる太陽でも、たった八分そこそこで光が届いてくる距離にある。）

人類の夢と希望を乗せて華と散ったスペースシャトルに乗ったとしても、スバルはまるで、一匹の「蚊」が月をめざして飛ぶ距離にある。

○　○　○

かくの如き、広大無辺の宇宙の中にあって今日もまた、おっかあにしかられて、あくせくと働かされているお父さん！

たまには、星空を仰いで、オリオンの「三つ星」や「スバル」がどこにあるか、さがしてみやあせ！

（筆者は、多治見市上野町在住）